音まち千住の縁

http://aaa-senju.com

「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」（通称「音まち」）は、
アートを通じた新たなコミュニケーション（縁）を生み出すことをめざす
市民参加型のアートプロジェクトです。
足立区千住地域を中心に、市民とアーティストが協働して、
「音」をテーマにしたまちなかライブ、ワークショップ、
トークイベントなどを展開します。

秋みつけた号

風情ある日本家屋が、新たなアート・スペースに！

千住「仲町の家」に来てみませんか？

千住のまちをつくった祖先のひとり石出掃部介吉胤（いしでかもんのすけよたね）の、ご子孫が大切に守ってこられた美しい日本家屋と庭が、千住仲町（せんじゅなかちょう）に残っている。大正末期の関東大震災で傾き、その後に建て替えられたというが、建て替える前に使われていた部材がほとんどそのまま再利用されて造られたと伝えられ、庭に入ると誰もがその、時を重ね、力強くも優しい風情にこころ惹かれる。

「音まち千住の縁」が、この家を活動拠点としてお借りするようになったのは、２０１６年の夏のこと。仲町の歴史を見守ってきた家だから、「仲町の家（なかちょうのいえ）」と呼びたいと、みんなで決めた。

同年の夏から秋にかけて、3つの企画が仲町の家をベースに始まった。「イミグレーション・ミュージアム・東京」は、アートで異文化と出会うプロジェクト。足立区に暮らすフィリピーノたちが語る映像展示「フィリピンからの、ひとりひとり　マキララー知り、会い、踊る―」と、千住在住30年のデンマーク人ジャーナリストが記録してきたまちの風景を展示した写真展「銭湯哀歌（エレジー）、人情屋台、消えゆく昭和～ケント・ダールが歩いた千住～」。トークショーやワークショップも交え、多くの方に足を運んでいただいた。

もうひとつが「千住・縁レジデンス」。アーティスト友政麻理子が、路地をテーマに、まちの人と一緒に6本の映画づくりに取り組み、その成果は「知らない路地の映画祭」として、この仲町の家で、上映された。

そして冬。まちの「音」を録音・編集して、音盤（レコード）をつくる「千住タウンレーベル」が本格スタート。

現在、仲町の家を主な「場」として活動するこれらのプロジェクト以外にも、ミーティングや交流の場所として、さらにはご縁ある他団体とのネットワークづくりの場として、仲町の家に集う人の輪は、少しずつ広がりを見せている。江戸の空気が通い、石出家の5姉妹の愛情をゆるやかにまとった空間は、今、アート活動の家として、千住に新たな縁を育む場となった。

［舟橋左斗子（足立区シティプロモーション課）］

1－3　千住「仲町の家」に来てみませんか？
4－5　マキララー知り、会い、踊る－ IMM　メルボルンと交流
6　メモリバがドラマに！小説に！ 千住タウンレーベル進行中!?

制作：仲嶋左斗子・戸塚愛美・富山修美／編集：松田崇・長瀬恭子／撮影：清倉純子／デザイン：瀬戸祥・山口真生
主催：東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、東京藝術大学音楽学部・大学院国際芸術創造研究科、特定非営利活動法人音まち計画、足立区

音まちかわらばん

音まちで出会う、素敵な人々を紹介します

写真：吉田武司

千住の人紹介 7　親子アートユニット「りーるとぅりーる」
鈴木 椋大・智子　すずきりょうた・ともこ

小さな電子音楽家　二人三脚で音を追いかけて

母ちゃん、風がバイオリン弾いてる

智子➡毎日フクロウの鳴き声が聞こえる、千葉の里山近くで暮らしています。週末になると音にまつわる活動に出かけて、千住周辺にも毎週のように来ています。 **椋大➡**俺が、音楽に母ちゃんを引きずり込んじゃったんだよね。 **智子➡**私は野外教育をやってきたので、椋大とも自然の中で遊んだりしてきましたが、音に特化したことはないんです。赤ちゃんのときから「音」に敏感な子で、窓の格子が風で鳴っているのを「母ちゃん、風がバイオリン弾いてる」と言ったり。4歳のころからYouTubeでYellow Magic Orchestra（YMO）を追いかけるようになり、2011年、私が連日ネットから参加していた、バルーンでスマートフォンを宇宙へ打ち上げる「SPACE BALLOON PROJECT」で、Open Reel Ensemble（※1）の音に衝撃を受けて。オープンリールという大型の磁気テープを使った録音再生装置を、早送りしたり巻き戻したり、自在に操って音をつくるんです。 **椋大➡**オープンリールは、音を直接手でゆがめられるから楽しい！ 「こんにちは」って吹き込んだ声を、リズムをつくって「こっ、こっ、こんにちは」って聴こえるようにしたり（笑）。 **智子➡**今、椋大はiPadでも作曲しています。 **椋大➡**音の師匠がいるんだよね。**智子➡**大野松雄（※2）さんね。この世にない音を生み出した人と聞いて、映画「アムの足音が聞こえる」を観たんです。その後すごく気になっていたところご本人に会えて！ **椋大➡**偶然。 **智子➡**椋大が大好きだってお話ししたら、孫のような弟子？にしてくれて（笑）。背中を見て育ってるような感じです。80歳を過ぎてもオープンリールやパソコンでつくってるその音が、凄くって。椋大は「負けられない、僕もやる」と、9歳のとき作曲を始めたんです。**椋大➡**大野さんと一緒に舞台に立つのが夢なんだ。

あれ？　もしかして！ってことばかり

智子➡私たち、音まちでは2014年春、足立市場で開催された大友良英さんの「千住フライングオーケストラ 縁日」に出てるんです。「いろいろ屋台」に出店しました。椋大は、市場のターレーという乗り物が大好きなので、その荷台を屋台にするって聞いて、やろうやろうってなって。もう3年以上経っちゃったんだね。 **椋大➡**歳、とった～（笑）。 **智子➡**「フライング」からヒントを得て、ハンガーに輪ゴムをくっつけてブンブンまわして鳴らす楽器や、牛乳パックでカズーっていう楽器を手づくりしたり。ハンガーは、近くのクリーニング屋さんで、たくさんいただきました。 **椋大➡**面白かった。知らないお客さんからクレープをもらったり、ほかの屋台を回ったりもしたね。 **智子➡**その後、野村誠さんの千住だじゃれ音楽祭「千住の1010人」や、「子どもの音まち」の手作り楽器ワークショップ、大巻伸嗣さんの「Memorial Rebirth 千住」の音楽隊にも参加しました。今回、アサダワタルさんの「千住タウンレーベル」の募集を知ったときも、何か自分たちにぴったりだなって思って。 **椋大➡**始まってみたら、あれ？ もしかして！ってことばかり（笑）。俺が初めてつくった曲が、実はアサダさんとつながってたんだ！ってわかったりね。びっくりだよね。

表向きの北千住駅しか知らなかった

椋大➡「まちの音を録音する」って聞いて、すぐに思いついたのが電車。 **智子➡**東武鉄道本社にインタビューさせてもらったのが印象的で。北千住駅の高架化の映像を見たら、300人くらいの人の手で、ひと晩で線路を切り替えるんです。よいしょ、よいしょって。 **椋大➡**もっと近代的かと思っていたら、ほんとにたくさんの苦労と汗と魂が詰まってできあがったんだって、見方が変わった。 **智子➡**私たち、表向きの北千住駅しか知らなかったんです。千住タウンレーベルを通して、普段会えない人と会えたり話を聞けたり、人といきなり音でつながるところが面白い。それを「レコード」にするんですよ。 **椋大➡**いろんな話を聞いて「昔」の音風景をつくりたいって思った。8月から東武鬼怒川線に蒸気機関車が復活するので、その音を使えば、昔を懐かしんでくれる人もいるかなって。北千住駅の昔から今、今から未来、っていうテーマでこれからも続けてやってみたい！ **智子➡**もんじゃ焼きのような千住の「ぽった」をテーマにしている人もいて、みんなで食べにいって、鉄板のジュージュー、カンカンいう音を録ったり。ほかのメンバーの作品を聴くと、千住ってこういうところなんだって発見があります。 **椋大➡**交通の便が発達している一方で、蔵や銭湯とか、東京なのにそういう古いものが残っていて。新しいものと古いものが混ざり合って、千住は「都」っぽい。（一同笑）

※1　旧式のオープンリールテープレコーダー複数台を楽器にして、リールやテープに直接手を触れながら演奏する、和田永を中心としたグループ／プロジェクト。
※2　音響デザイナー。TVアニメ「鉄腕アトム」の効果音を担当し、アトムの足音やビームの音などをつくった、日本の電子音響の草分け的存在。

Profile

今、電子音楽界で最も若いクリエイターのひとりとして注目されている中学1年生とその母。音や映像作品の制作、SNSの発信も続けている。「CREATIVE HACK AWARD 2016」で作品『みえない音』がソニー特別賞受賞。レゴブロックの大会「ブリックマスターコンペ2017」でも優勝するなど活躍めざましいが、学校の勉強はちょっと苦手で、友達との間には「国境線がある」と本人談。タウンレコーダーとして「電車エレクトロニカ」を制作中。

「フィリピンからの、ひとりひとり　マキララ ―知り、会い、踊る―」映像展示 ＊1

column

1 千住仲町をつくった 石出掃部介吉胤 いしでかもんのすけよしたね

千住仲町あたりは、江戸時代の初めごろには低い湿地帯で、一面に葦の生える隅田川の河原だったという。この広大な湿地帯を開拓し、人が住んだり作物を植えたりできる土地に変えたのが、石出掃部介吉胤だ。

隅田川に最初に架けられた橋である千住大橋の工事に携わり功績をあげ、その後、隅田川にほど近い土地を開拓。さらに、その土地を水害から守るため、高さ約４メートル、長さ約２キロに渡る土手を築いた。この土手は掃部堤［かもんづつみ］と呼ばれ、現在の墨堤通りにおおむね重なる。

開拓された土地は後に「掃部宿［かもんじゅく］」と呼ばれ、宿場町だった千住宿に加えられることになる。現在の千住仲町を中心とするエリアである。

狩野歌之助筆《石出掃部介吉胤肖像》絹本着色、軸装、一幅
協力：足立区立郷土博物館

column

2 大家さんが語る

この仲町の家（石出家分家）に住んでいたのは、小説になりそうな仲良し姉妹でした。私の母は次女で、本家に嫁いでこの家（分家）を出ましたが、私のこの家の記憶は、４人のおばたちと深く結びついています。

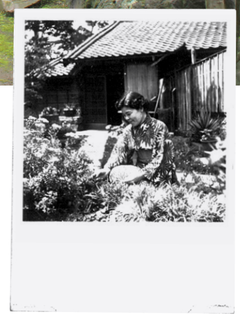
長女は、姉妹のまとめ役で、大黒柱みたいに妹たちを見守っていました。一番長生きしたのが、三女です。お茶の先生をしていて、奥の茶室もそのために造ったと聞いています。平成17年に96歳で亡くなりました。食事の支度などを一手にやっていたのが四女。一番家庭的できれい好き。末っ子の五女のおばが美人でね。都会の女性という感じがして憧れていましたね。

仲町は大半が戦争で焼け、本家も焼けてなくなりました。一方、分家（現・仲町の家）は、勝手口の門のところで火が止まり焼け残った。おばたちが亡くなって、この家を受け継いだ以上は、何とかして守りたいという気持ちがあります。歴史を背負ってる家ですからね。

それでも維持が大変です。一度は介護事業者にお貸ししたこともあるのですが、隣の「くろい家」＊をお借りいただいた経緯もあるので、音まちのみなさんに使っていただこうと決めました。

（談・石出通治氏）

＊仲町の家の隣にある石出家所有の黒い外壁の家屋。
かつて鉄工所、居酒屋、釣堀だったといわれ、築50年を超える。
2016年１月から５月に音まちで大巻伸嗣「くろい家」（展示）を開催。

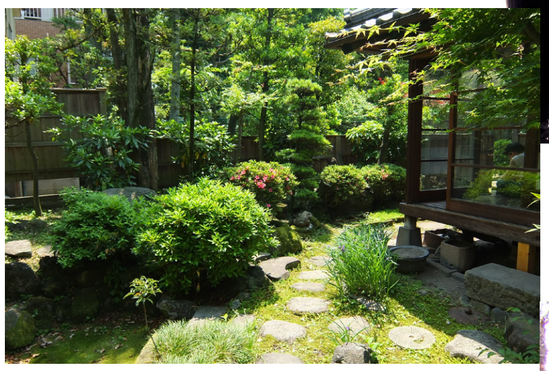


石出家分家の古いアルバムに残る、三女の野点

勝手口の門を入ってすぐに置かれた大釜の風景は、今も昔も変わりがない。雨水がたまっているが、銅の雨どいを流れてくるせいなのか、ボウフラが発生しない。石出さんによると五右衛門風呂ではなく、醤油などを煮ていた釜ではないかとのこと。

写真＝冨田了平［＊1］／あやのこうじ［＊2］

来年１月から２月に仲町の家で
公開活動を行う音楽ユニット 表現（Hyogen）。
音楽カフェ「茶MUSICA（チャムジカ）」開催！



＊2

表現（Hyogen）

権頭真由（アコーディオン／歌）　佐藤公哉（ヴァイオリン／歌）
古川麦（ギター／歌）　園田空也（コントラバス／歌）

2005年東京藝術大学在学中に発足。
失えないものたちを載せて旅する音楽の箱舟。
即興演奏を下敷きとした作曲を特色とし、
人や空間と共鳴しながら音を紡ぐ力に定評がある。
http://sound.jp/hyogen/

友政さん
生け花にチャレンジ

column

3 仲町の家を拠点に活動する 美術家 友政麻理子さんの話

2015年から、千住・縁レジデンス「知らない路地の映画祭」の活動などで千住に滞在しています。昨年の秋、実家の近くのコスモス畑で摘んできた花束を、この家にあった大きな花瓶にさしてみたのが最初で、その後、映画祭で出演いただいたミリオン通りの花屋さんと親しくなったこともあって、花を生けはじめたら楽しくなってきちゃって（笑）。店主さんにアドバイスをもらいながら生けています。

それからこのごろ、ふと思い立って急に掃除を始めることがあるんです。石出さんの話を聞いて、お茶やお花をたしなんだ５人姉妹の三女、窓の欄干がすり減るほど拭き掃除をしていた四女のおばさまに、もしかして導かれてる？ と思いました。このまちに仕掛けにきたつもりでしたが、もしかしたら、仕掛けられているかもしれません（笑）。

写真展「銭湯哀歌（エレジー）、人情屋台、消えゆく昭和 ～ケント・ダールが歩いた千住～」＊1

草むしりと交流会

音まちスタッフや地域の協力者で２ヶ月に一度、庭の草むしりをしている。毎回、ビフォー・アフターが見違えるほど変わり、やりがい大！草むしりが終わった後の、苔むす広い庭が何とも美しく、縁側から、自分で手をかけきれいになった風景をほれぼれと眺めながら、みんなで交流するのが常。飛び入り歓迎！ 軍手を用意してお待ちしております。

calendar

「仲町の家」公開カレンダー

2017年
11月18日（土）草むしりと交流会

2018年
1月13日（土）　草むしりと交流会
1月28日（日）　表現（Hyogen）「茶MUSICA」
2月10日（土）　表現（Hyogen）「茶MUSICA」
2月11日（日）　表現（Hyogen）「茶MUSICA」
2月17日（土）　表現（Hyogen）「茶MUSICA」
3月17日（土）　草むしりと交流会

＊草むしり＝いずれも集合は朝9:00（雨天延期）
＊日程は変更になる可能性があります。

＊ほかにも公開予定あり。
詳細は「音まち千住の縁」公式サイト内
「千住・縁レジデンス」ページからご覧ください。
http://aaa-senju.com/residence

MAKILALA

フィリピンからの、ひとりひとり マキララ

――知り、会い、踊る――

白坂ゆり［アートライター］

Individuals from the Philippines
MAKILALA: to Know, Meet and Dance

「フィリピン人はフレンドリーで、誰とでもフェアに話ができる」「問題があってもオープンに話す」「話しているうちに問題が柔らかくなって、心が楽になるの」。

7月22日～8月7日の土日月曜に仲町の家で展示されていたインタビュー映像「Their history, to be our story」でロに言われていた言葉だ。9人のフィリピーノたちがフィリピンでの暮らしや家族、来日してからの仕事や結婚、子育てなどこれまでの人生を語った作品。そのうち日本で生まれ育った若い二人は将来の夢などを語る。演出家の阿部初美が聞き手となり、インタビューを構成・演出。映像の撮影と編集は冨田了平。日本大学佐藤慎也研究室が、古い日本家屋にステンドグラスなどを配して、それらの映像を展示する空間をつくりあげた。言葉の壁、日本で就けない職種もあること、日本人の夫との家族観の違いなど、苦労が伝わるが、みなどこか明るい。

7月29日、このインタビュー映像を観た後、東京藝術大学千住キャンパス 第7ホールで開催されたパーティー「フィリパピポ!!」に参加した。ステージや客席で、インタビュー映像に登場した女性が歌い、ダンスする姿を観ながら、「みんな一緒に食べたり、歌ったり、踊ったりするのが好き」「家族を大事にする」などと映像で語った真意がわかるような気がした。

この、映像インスタレーションと交流パーティーを合わせたプロジェクト名は「フィリピンからの、ひとりひとり マキララ―知り、会い、踊る―」という。

マキララとは、フィリピン語で「知り合う」という意味。地域に暮らす外国人「ニューカマー」との交流を通じて、彼らの生活様式や文化的背景を紹介する「イミグレーション・ミュージアム・東京（IMM）」のプログラムである。東京23区の中でフィリピン人の居住者数が最も多い足立区で、2014年から継続してきたフィリピンコミュニティとの交流をベースとしている。実は昨年もこの映像展示とパーティーを一対としたプログラムが行われた。パーティーの後、フィリピーノたちが「また来年！」と笑顔で言ったのだという。

今年のパーティーは「真夏の海の夢 A Midsummer Ocean's Dream」をテーマに、ショーの内容も新たに開催された。華やかでキレのいいタヒチアンダンス。続いて、元歌手の女性が、キャロル・キングの名曲「You've Got a Friend」を歌いあげる。苦しいとき、うまくいかないとき、私の名を呼んで。友達がいるよと。

学校生活のことを歌った少女ラッパー。日本人の少年がプロデュースに挑戦したラテン音楽中心のショー、ベトナム系ラッパーMC NAM（ナム）や、台湾人留学生を含むバンドの演奏など、若い世代も加わる。最後は「zumba（ズンバ）」というラテン・エクササイズに合わせて、ステージと客席が一体となり、日本人もこんなに踊るんだと驚かれるほどの盛り上がりだった。レシピを教わったという日本人スタッフ「スーパピポ（＊）」の手によるフィリピン料理も美味しかった。

もちろんインタビュー映像もパーティーも一朝一夕にできたものではない。国民の90％がカトリック信者だというフィリピンの人々は、梅島にあるカトリック梅田教会に毎週日曜日に通っている。そこへ、IMMのメンバーである東京藝術大学の大学院生・森本菜穂が、信者ではないのだが2015年から毎週通い、信頼を得ていった時間の上にある。作品の下地となった事前のロングインタビューも森本が中心となって行った。相手に心を開いてもらい、文字にしていくことは大変な労力だ。彼女を系口に、音まちのスタッフや学生たちなども力を合わせて企画を実現させたのだ。

後日、梅田教会の礼拝を見学した。筆者自身に信仰する宗教はないけれど、信じるという行為が人を支え、人を結ぶのだなと実感する。日本では昨今、自己責任という言葉のもと、自立ができないと他者や社会と関係が結び辛い風潮があり、誰にも語れず孤立していく人もいる。けれど、個人の自立は、支え合いの中からこそのびやかに生まれるのではないだろうか。

人の歴史、生きる思いを描いた映像と言葉。そしてリアルな出会い。歌とダンスという、祭りの根源的な表現が人々をつなぐ。みんなが笑うアートプロジェクトなんてそうそうない。

＊「フィリパピポ!!」第2弾ではパーティーをつくりあげるスーパーなパピポ（＝パーティーピーポー）「スーパピポ」を募集・結成した。

音まちのIMMが メルボルンのイミグレーション・ミュージアムと交流

音まちでお馴染みの「イミグレーション・ミュージアム・東京」（以下、IMM東京）が、メルボルンの本物の（？）イミグレーション・ミュージアムを訪れた。2017年5月、IMM東京を主宰する美術家・岩井成昭とスタッフや学生たちが、メルボルンのモナシュ大学アジア研究所の招聘でオーストラリアに。

移民大国オーストラリアは、現在でも国民の2人に1人は自身か両親のいずれかが国外生まれ。「イミグレーション・ミュージアム」は、そんな国の状況を反映して、移住の歴史資料展示のみにとどまらないユニークな文化施設である。メディア・アート的な展示手法で今日の人々に光をあてる常設展示の「Identity: yours, mine, ours」は、かつて訪れた岩井に大きな影響を与え、IMM東京を始める契機ともなった。さまざまな民族コミュニティを取り上げる企画展示や、特別展なども開催している。我々が訪れたときには、難民や亡命者の語りを中心とした特別展示「They Cannot Take the Sky: Stories from Detention」が開催されていたが、個々人の語りを重視する姿勢は、千住でのマキララの映像展示「Their history, to be our story」とも共通している。

展示のほかにも、民族フェス的イベントや学童向けワークショップなどの教育普及活動、市民が自身の移住のルーツを調べられるリサーチサービスなど、多彩な活動を展開している。

秋にはメルボルンのイミグレーション・ミュージアムから3人のスタッフと、アーティストが来日し、東京でシンポジウムが開催される。公立の文化施設でありながら、過去の歴史展示にとどまらず、今を生き続けるメルボルンのイミグレーション・ミュージアムと、アンチ・ミュージアムを標榜する岩井のIMM東京。両者の対話は、未だに文化多様性に対する意識が未成熟な日本社会にどのような投げかけをするのだろうか。

国際シンポジウム　"イミグレーション・ミュージアム"――日豪の対話　文化多様性に向けたコミュニティ・エンゲージメント

日時＝平成29年10月15日（日）14:00-18:00
会場＝東京藝術大学 上野キャンパス（音楽学部5-109教室）
料金＝参加無料（申込不要）※同時通訳あり
助成＝オーストラリア外務貿易省 豪日交流基金

出演＝イミグレーション・ミュージアム・メルボルンの専門スタッフの方々
岩渕功一（モナシュ大学教授・モナシュアジア研究所所長）
岩井成昭（美術家、イミグレーション・ミュージアム・東京 主宰）
熊倉純子（東京藝術大学教授）ほか

平成29年度 文化庁 大学を活用した文化芸術推進事業／グローバル時代のアートプロジェクトを担うマネジメント人材育成事業「&Geidai」（主催＝東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科）

写真＝冨田了平［映像展示］／遠藤純一郎［パーティー］

メモリバがドラマに！ 小説に！

「Memorial Rebirth」（通称：メモリバ）がドラマのワンシーンに登場した。NHKの地域発ドラマ「千住クレイジーボーイズ」は、笑って泣けるヒューマンコメディードラマである。2017年2月にBSプレミアムで放送され、その後地上波デビューも果たした。千住のあちこちで、ドラマの撮影が行われていたのを見かけた方も多いのでは。

メモリバはドラマの中でまちのイベントとして描かれている。地域の人々が会議を重ね、協力して店々にポスターを貼り宣伝するなど、現実のメモリバがモデルになっている。登場人物たちが、夜のシャボン玉の風景に心を奪われる様子は、まさに千住のメモリバと重なる場面だ。

ドラマのノベライズ本も出版された。千住のまちの魅力とシャボン玉の風景がどのように描かれているのか、ぜひ千住の書店等でご覧になってみてはいかがだろうか。

2017年夏、NHK地域発ドラマの人気作品をノベライズ！

千住クレイジーボーイズ　高羽彩 作　諸星久美 ノベライズ

あらすじ

「意地の張りどころ。間違えんじゃねえよ」

かつては一世を風靡したものの今や人気ガタ落ちのアラサーピン芸人・恵吾。貯金は底をつき、家も追い出され、昔組んでいた漫才コンビ「クレイジーボーイズ」の相方・行（ゆき）が住む東京足立区・北千住エリアの家に転がり込む。

そこで出会うのは、シングルマザーや、元ヤンキーの床屋や、銭湯のダンナら、個性豊かなまちの面々。そのおせっかいさに恵吾は「ぬるい」「ダサい」と突っかかりトラブルばかり。しかし、そんな人たちに触れるうち、恵吾の日々に変化が生まれて……。

発行元「センジュ出版」について

2015年9月、足立区千住3丁目の築40年以上の玉井荘2階をリノベーションして創業。"しずけさとユーモア"を大切にする小さな出版社（代表 吉満明子）。事務所の一角にちゃぶ台を置き、6畳のブックカフェ「SENJU PLACE」も併設。地域に根ざしたイベントなどを数多く手がけている。

http://senju-pub.com

☎ 03-6337-3926

千住タウンレーベル進行中!?

2016年11月に立ち上がった、まちと音で遊ぶ新しい実践、千住タウンレーベル。
今や30名ほどになったタウンレコーダー（記者）は、
2月にデモ音源の制作・発表を終えてから、「音盤千住」第1号のリリースに向けて活動している。
まちを素材に音で遊ぶこと、音を使ってまちで遊ぶことに馴染み始めた彼らの近況を覗いてみよう。

1 ドキドキの試作品（デモ）発表会

50名以上の聴衆が見守る中、千住のお寺・安養院で９組のタウンレコーダーが試作を発表。千住の地図を五線譜に見立てた「おんぷ de 千住」、実在するバス路線の新しい車内アナウンスを考案する「勝手に車内アナウンス」など、ユーモアあふれる作品が出揃った。

2 メディアデザインのカタチ

発表会をふまえて、「音盤千住」を実際にどのようなメディアに落とし込むのか、検討会が何度も開かれた。最終的には、ＬＰレコードというかたちをとることに。ＣＤやカセットテープも候補に挙がったが、レコード盤独特の音色とサイズ、そして手から手へと手渡されていく風景に魅力を感じてのことだ。

3 まちに出る

「音盤千住」第１号には、ブラッシュアップしたデモ音源に加え、新しいトラックも収録される。レコーディングは、タウンレコーダーたちが頭を悩ませ、プロの手も借りながら、例えば千住河原町のお囃子や、商い芸ともいえる「ダミ声」、そして「ぼった」など多岐に渡る音を、まちに出て採集している。

「音盤千住」は音だけでなく、テキストや写真とともにパッケージングされ完成する。秋の完成後、年明けにリリースイベントも開催予定だ。

この新しいローカルサウンドメディアの楽しみ方は、それを使いこなすことにこそある。「音盤千住」が人と人をつなぎ、縁を紡ぎ、語りや会話を生み、輪を拡げていく。アーティストのアサダワタルとタウンレコーダーたちによる、まちをめぐる音遊び。面白がり方、関わり方は人それぞれ。自分のやりたいことを、できる範囲でＯＫ。カタチをとり始めた「音盤千住」は、今ようやく、まちの人の手に渡ろうとしている。

11月には完成！

完成品［パッケージ］をどう手渡し、使っていくのか。
「面白がり方」を開発してくれるメンバー募集中！

だじゃれ生命体 千住の先住民

宮田篤 描き下ろし！

A	野村誠　千住だじゃれ音楽祭	東京藝術大学 千住キャンパス
B	千住・縁レジデンス	仲町の家
C	大巻伸嗣　Memorial Rebirth 千住	関屋公園

【お問い合わせ】「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」事務局
WEB　http://aaa-senju.com/contact
電 話　03-6806-1740（13:00－18:00、火曜・木曜除く）
メール　info@aaa-senju.com

＊「info@aaa-senju.com」からのメールを受信できるように設定してください。
＊個人情報は厳重に管理し、本事業の運営およびご案内にのみ使用します。

これから開催！

大巻伸嗣 Memorial Rebirth 千住 2017 関屋

無数のシャボン玉で見慣れた景色を変貌させるアートパフォーマンス「Memorial Rebirth」。
千住で7年目を迎える今回は、関屋公園にて開催。

開催日　平成29年11月26日（日）
料　金　入場無料
会　場　関屋公園（東京都足立区千住関屋町17-7）
アクセス　京成関屋駅・牛田駅より徒歩約8分

1日だけのティーンズ楽団 出演者大募集！

10代のための藝大ワークショップに参加して、メモリバに出演しよう。
ティーンズ楽団は、メモリバのために結成される音楽・パフォーマンス隊です。
藝大卒業生の講師と一緒に「しゃボンおどり」の演奏や踊りを練習しませんか？

A. 音楽コース
これから楽器をはじめる人も、長年やっている人も、経験に合わせて練習していこう。金管、木管、打楽器、笛、鍵盤ハーモニカ、カスタネット、タンバリンなど、楽器は何でもＯＫ！

B. パフォーマンスコース
振り付けを覚えて踊ったり、集まったみんなの得意なことをもとに、本番の装いを考えたり。シャボン玉の風景に彩りを添えるためのワークショップ。楽器はやらないけれど、関わってみたい！という方はこちら。

対　象　足立区在住・在学の10歳～19歳。本番・リハーサルのほか、3回のワークショップのうち1回以上に参加できること。
開催日　ワークショップ：10月7日（土）・10月29日（日）・11月4日（土）各日13:00-15:00
リハーサル：11月25日（土）☆
本番：11月26日（日）☆
※両コース同時開催
☆参加必須

講　師　くるくるチャーミー［松岡美弥子・富塚絵美・田中文久］
料　金　参加無料［各コース定員15名程度（先着順）］
会　場　東京藝術大学 千住キャンパス スタジオA（東京都足立区千住1-25-1）ほか

詳細・お申し込みはこちらまで　→　http://aaa-senju.com/ohmaki

冬のイベント開催予告

アサダワタル　千住タウンレーベル

開催日　平成30年1月21日（日）
会　場　千住地域内

「音」と「まち」をテーマに、千住のローカルサウンドメディア発行をめざす１年間の活動を経て、いよいよ11月に最初の「音盤千住」が完成予定！ リリースに合わせて、千住のまちなかを舞台に収録作品に耳を傾けるイベントを企画中。音源の制作秘話なども聞けるかも!?

千住・縁レジデンス｜表現（Hyogen）

開催日　平成30年1月28日（日）・2月10日（土）・11日（日）・17日（土）
会　場　仲町の家（東京都足立区千住仲町29-1）

演劇やダンス、詩など、他分野とのコラボレーションも多い音楽ユニット「表現（Hyogen）」が、千住の日本家屋「仲町の家」を舞台に、音楽ライブを開催します。

野村誠　千住だじゃれ音楽祭

開催日　平成30年2月4日（日）
会　場　東京藝術大学 千住キャンパス 第7ホール（東京都足立区千住1-25-1）

抱腹絶倒の第一回定期演奏会「音まち千住の大団縁」から間もなく5年。タイ、インドネシアとの交流企画や、足立市場で開催した「千住の1010人」を経て、いよいよ第二回定期演奏会を開催します。さらに広がった「だじゃれ音楽」の可能性にぜひご注目ください。

＊プログラム内容は変更になる場合がございます。あらかじめご了承ください。
＊各プログラムの詳細は「音まち千住の縁」公式サイトをご参照ください。
＊本事業は東京アートポイント計画として実施しています。